

地域医療連携だより

H22.5
第24号

兵庫医科大学病院

〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号
TEL.0798-45-6111 (大代表)
<http://www.hosp.hyo-med.ac.jp/>



理 念

兵庫医科大学病院は、安全で質の高い医療を行い、地域社会へ貢献するとともに、よき医療人を育成します。

基本方針

- 患者の立場に立った医療の実践
- 人間性豊かな、優れた医療人の育成
- 高度で、先進的な医療や医学研究の推進
- 健康増進活動による保健・福祉の推進
- 地域の医療機関との円滑な連携



地域医療・総合相談センター長 就任のご挨拶



センター長

内科 循環器内科 診療部長 増山 理

このたび4月1日付けで地域医療・総合相談センター長を拝命いたしました。兵庫医科大学病院地域医療・総合相談センターは2006年4月に創設され、難波光義初代センター長（現副院長）の元に地域の先生方との連携推進の一翼を担って参りました。当センターは単にかりつけ医の先生たちからの流れをつくるための紹介・逆紹介の支援

組織にとどまらず、入院・通院する患者さんおよびそのご家族等が適切でよりよい医療・社会生活が営めるような包括的援助を行ったりする活動も推進してきました。すなわち、地域住民の皆さんに医療・保健・福祉の統合の下、適切な医療が提供できるような活動を推進するための施設と当センターを位置づけております。そのために、従来から院内の各専門外来・病棟部門はもとより、内科 総合診療科、医療社会福祉部、栄養サポートチーム（NST）、感染対策チーム（ICT）、褥瘡対策チームなどの横断的活動を行うスタッフと迅速な情報交換を行いながら、「最も適切な医療を、もっとも必要な時期に、最も優れたスタッフによって」提供できるよう、職員一同意欲的に取り組んでおります。今後とも、地域の先生方と手を携えながら少しでも患者さんとそのご家族のお役に立ちたいと考えておりますので、ご要望やご叱責を遠慮なくお寄せ頂きますよう、お願い申し上げます。

副院長・看護部長就任のご挨拶



副院長（療養環境担当）・看護部 部長 山田 明美

このたび、太城病院長のもと、療養環境担当副院長および看護部長を拝命いたしました。看護師は距離・時間ともに患者さんと一番近い立場にあり、入院・外来を問わず、患者さんの療養環境を整える重要な役割があります。同時に、チーム医療において各専門職と横断的にかかわり、連絡調整役を果たしております。その意味からも当院の医療従事者や事務職員が一丸となって快適な療養環境提供に努めることができるように、その職責を果たす所存でございます。

また、本年4月より、地域医療・総合相談センターには専任の退院調整看護師を配置し、より一層、切れ目のない地域医療連携強化に取り組む体制を整えました。さらに、当院の専門看護師・認定看護師が地域の看護の向上にも貢献できる姿勢を示し、活用していただけるシステム作りに取り組むしたいと思います。

地域住民の皆様、および先生方から選ばれる病院作りをめざしていきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

新任診療部長・部長の紹介



精神科神経科 診療部長 松永 寿人

このたび、守田嘉男前教授の後を引き継ぎ、兵庫医科大学精神科神経科学講座の主任教授および診療部長に就任いたしました。

昨今のストレス社会において、うつ病や神経症などに罹病する患者さんが急増しております。そして発達障害など児童青年期の問題から高齢化社会に伴う認知症対策、さらには他の診療科で治療を受けている患者さんへのメンタル・ケアなど、当科に期待されている領域は近年ますます拡大する傾向にあると言えます。

今後は今まで以上に他科の先生方や地域医療機関と協力して連携を深め、教室員一同日々研鑽を重ねながら、地域の精神科医療の中核として社会貢献を果たしてゆきたいと考えております。今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



薬剤部 部長 木村 健

平成22年4月1日に薬剤部長として就任いたしました。私は、病院薬剤師として21年間勤務したのち、薬学教育が六年制になったのを機に4年間薬学部にて大学教員として従事してまいりました。

現在、医療連携への様々な取り組みは地域で定着しつつあり、医療連携が地域医療推進のキーワードとなっています。当院も外来処方を含めた院内処方とし病院薬剤師と保険薬局薬剤師との「薬薬連携」に力を入れ、入院時から退院後の紹介施設へと継続した患者ケアを見据えた薬剤師のかかわりがとても重要であると考えています。「医療機関完結型医療」から「地域完結型医療」へ変換していくために、医療・福祉の分野で薬剤師が地域医療連携において具体的な行動をおこなうべき時代になったと考えています。

本院薬剤部は、今後も地域社会に貢献するため、「臨床」、「教育」、「研究」の3つの分野において積極的に取り組んでいきます。今後とも皆様方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

整形外科 骨軟部腫瘍クリニックの紹介

整形外科 准教授 麩谷 博之

骨軟部腫瘍クリニックは整形外科診療の 1 つで、主に、四肢や脊椎に発生した骨腫瘍と軟部腫瘍の診断と治療を行っています。スタッフは私以外に、福永訓助教とレジデント 1 名の 3 名です。

当クリニックでは良性腫瘍に加えて、生命を脅かすような悪性腫瘍を扱っています。よって、早急に対応すべきケースや、共同した治療のためにきめ細やかな連携を必要とするケースがあります。

前者の 1 つに骨肉腫があります。骨肉腫は骨に原発する悪性腫瘍の代表であり、若者を突然に襲う“不治の病”としてしばしばドラマの題材となるため、一般的な知名度が高い疾患です。近年、系統的な術前化学療法を導入によって、初診時に転移のないグループでは 5 年生存率が 60 - 70 % に達しています。一方、初診時、既に転移を認めるグループでは 20% と低迷しており、この 2 つのグループ間では、予後に大きな隔たりがあります。よって、転移を来していない状態での早期発見と、その後の迅速な治療が極めて重大です。当院では、迅速な対応が可能であると共に、整形外科、放射線科、病院病理部、小児科、外科などの協力体制によって、集学的治療が行われています。これによって、さらなる予後の改善に積極的に取り組んでいます。骨腫瘍と診断された患者さんのみならず、異常が疑われる時は、いつでも相談をお受けしたいと存じます。

後者には、がんの骨転移による病的骨折があります。現在、日本は過去に経験のないような高齢化社会に直面しており、これによって、年間新たながん患者は 70 万人に達しています。がん患者の増加で、骨転移例の絶対数も増えています。また、近年の癌治療の進歩で原発巣のコントロールがよくても、骨転移が問題となるケースが増えています。

これらが相まって治療を必要とする病的骨折の患者数は年間 20 万人以上と試算されています。

一方、医療現場ではマンパワーが不足するといった逆風の中でも、個々の患者さんへのきめ細やかなフォローアップは揺るがすことができません。これらの問題に対応するには、当該科の間の連携のみならず、地域医療機関どうしの連携が必須です。

当科では、地域の医療機関との協力体制をさらに深めて、骨軟部腫瘍に関する迅速で効率的な協力体制と信頼関係を構築して、患者さんに安心していただける治療を常に提供したいと願っています。より一層のご指導・ご協力をお願い申し上げます。



放射線撮影装置の導入

● 循環器血管撮影装置の導入 ●

昨年 10 月に、東芝メディカルシステムズ社製の X 線血管撮影装置 (Infinix Celeve CF/BP) が中央放射線部 IVR センターの血管撮影室 (第 4 室) に更新導入されました。

この血管撮影室は、主に循環器領域に使用されており、虚血系心疾患、不整脈、末梢血管の閉塞性動脈硬化症などの検査および治療が年間 1000 例以上施行されています。

Infinix Celeve CF/BP は、今までの装置と大きく異なり X 線管から発生した X 線を受ける受像システムがイメージインテンシファイアという機構からフラットパネルディテクタという機構に変わり、薄型で長寿命であり、歪みなく高精細な画像を提供できるようになりました。

(次ページに続く)



また、同じ機構を二つ搭載したバイプレーンシステムを採用し、多方向同時撮影も可能であり、腎障害のある患者さんの造影剤投与量を少なくすることに寄与しております。

昨年3月のPACS化に伴って導入された放射線画像ネットワークシステムも有効に活用し検査室内のモニタにCTやMRIも含む過去の画像やレポートの表示が可能になり、患者情報を無駄なく利用することで、検査や治療の効率も格段によくなりました。

● 最新鋭 128 列マルチスライス CT 装置の導入 ●

本年3月より、128列のマルチスライスCT (SIEMENS社、SOMATOM Definition AS+) (写真)が稼動いたしました。

このCTは128スライスの同時データ収集が可能で、0.3秒のガントリ回転速度により検査時間が飛躍的に短縮されました。撮影の高速化により頭部の血管造影検査では約3秒、心臓冠動脈撮影では約5秒で撮影できます。今までは描出困難であった高心拍症例や不整脈症例にも薬剤負荷なしで心臓冠動脈が撮影できます。全身を約10秒で撮影することができ、比較的少量の造影剤でも、良好な造影効果をもつ造影検査ができ、4DCTも可能です。加えて、被曝低減機能により、容易に被曝線量を下げることができます。大容量のX線管球を搭載していますので、体格の良い患者さんに対しても、良好な画像を撮影でき、短時間で検査が終了することから患者さんにも好評で、安心で、やさしく、高機能なCT検査が可能となりました。

(文：中央放射線部 中江保夫、廣田省三)



防災訓練を実施しました

平成22年1月15日(金)、当院10号館北側玄関前にて、教職員(医師、看護師、コメディカル、事務職員)及び医学部学生(4年生)、合計約150名が参加し防災訓練を実施しました。

この訓練は、大規模災害の発生により多数の負傷者が本学病院に搬送された場合を想定し、患者さんを円滑に受け入れトリアージを行うことを目的としており、平成14年から毎年実施しています。医学部学生は授業(診察法実習)の一環として患者役や家族役等で参加し、負傷者役にはムラージュ(ケガの状態をリアルに特殊メイクすること)を施すなど実際の現場さながらの緊迫した状況の中、参加者たちは真剣に取り組んでいました。

訓練終了後、太城病院長及び救命救急センターの訓練指揮者から、「実際の現場では何よりもスタッフ間の連携のもと迅速な対応をすることが重要であり、今回の訓練ではスタッフ間のコミュニケーションが必ずしも十分ではなかった。大きな声でハッキリと声を掛け合うよう留意すること。」との講評がありました。

いつどのような状況で発生するか分からない災害に対して、負傷者の円滑な受け入れ体制の確立は災害拠点病院としての使命です。今回の訓練で得た課題を検証し、更に有意義な訓練とすべく教職員一同取り組んでいきます。

